

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

54

「森の木を伐って、そこに市民会館を建て、そこに市民会館を建て、それがどんな価値を生むのか。森は私たちに夢を与え、励まし安らぎをもたらしている」

かつて札幌市が市内の森林公園を伐採し、市民会館を建てようとした時、地元青年会議所が猛烈な反対運動を展開した。

今、樹齢三百年を優に超える樹木群が見事な森を成し、多くの人たちに親しまれる立派な公園となっているが、森の価値を実感する人々の熱い思いが伐採を中止させたという歴史を持つ。

私は何回か十和田湖に行き機会があったが、そのたびに奥入瀬溪流を歩いた。人生において立ち止まり、振り返り、天を仰ぐ時もある。困ったことや悩みを抱えている時、ゆっくりと歩き溪流に包まれてみたくなる。木々の緑、せせらぎの音、川の流れ、風の感覚、それらのすべてが心身を包み込み、癒される。ただ歩いていけると心が「無」になり、向かうべき方向、進むべき道が見えてくることもある。

住田町議会の議長時代に「何十周年」という式典で挨拶をしなければならぬ時、朝早く種山ヶ原によく出かけ、早朝の

牧場を一人歩いた。霧、風、小鳥のさえずりが朝を告げ、爽やかで清々しい。奥入瀬溪流を歩いたときのような感覚に覆われる。朝露の草原をたどると頭の中が空になっていき、いつしか式典の挨拶文が沸々と湧いてくる。

人を育む自然の力

住田町世田米

紺野 朋夫

見慣れた風景や身近な自然の素晴らしさに気づかないことがある。アメリカのオレゴン州クス郡から十数人の友好使節団が昭和六十三年に気仙地域を訪れたときのことだ。

「岩手を旅されて、もっとも印象的なところはどこですか」という問いに返ってきたのは、全く

予想していなかった場所だった。それは遠野市から来内を通り、住田町下の有住の新切に抜ける蔵峠であった。

沢に沿って狭い道が続き、両側が木立に覆われている。それがいいという。「もう少し道幅を広げ、まっすぐにして走りやすい立派な道にしないといけない」と、誰もが思っていた道である。

森は単に心地よさをもたらすだけでなく、まらな土壌らしい風土が築かれていく。

人は誰でも進む道が分からなくなる時がある。困難な局面に直面し、苦悩を抱える場面に遭遇した時、自然はそっと包んでくれる。教え、導き、豊

かな人間性、人々と交感する感性を育んでくれる。それは、山に恵まれていたからである。生きていく糧が山にはあった。栗、トチ、ドングリなどの木の実、さらにはさまざまな山菜が豊かだった。

豊かな里山は、この地域の自然の恵みを象徴する五葉山につながる。奥

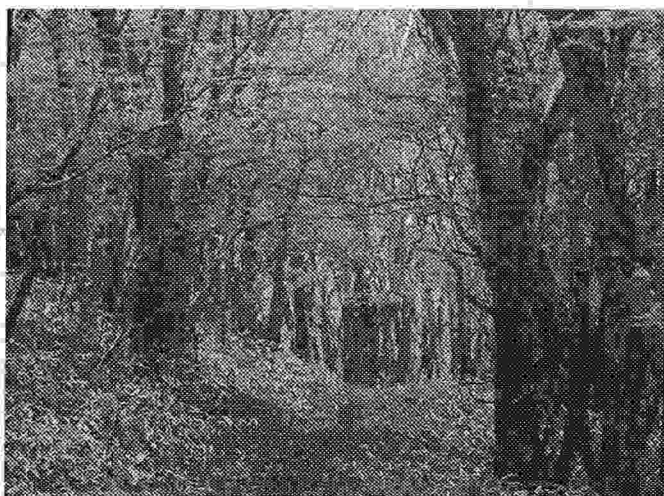
ものなのかもしれない。その中で、自分に与えられた特性や特質は、日々の営みを通して社会に還元していくことで初

元住田町議会議長。

【執筆者プロフィール】一九二五年生まれ、住田町世田米在住。住田町社会福祉協議会会長。

五葉山麓に広がる豊かな森。「自然の中に生きる生き方が正常な生き方」と思う

リレー
エッセイ



五葉山麓に広がる豊かな森。「自然の中に生きる生き方が正常な生き方」と思う